

総合学習・生活科分科会

『地域の中の自分を見つめ、社会参加意識を高める総合・生活科の授業づくりをめざして』

実践報告に先立ち、共同研究者村越より研究課題に沿って、特に（３）総合・生活科と、学校づくりや教育課程の在り方については、新学習指導要領で示されたカリキュラムマネジメントを、しうるものとして、本分科会でこれまで議論されてきた「地域に根ざした教育課程づくり」をベースに教師が学校全体の取り組みにどう進めていくかがそのカギであるということ、さらに、「地域に根ざした教育実践によって子どもがモノの見方をどう獲得するか」「授業をつくる教師の、授業づくりの視点は何か」ということについて、議論の柱として確認があった。

一 実践報告

1 斎藤鉄也実践

この実践を通して、生活科の学びが子どもたちの生活をどう豊かにするのか、何につながるのかという課題提起が出された。議論の中では、まず「認識」＝ものさしという考え方であることを押さえた。斎藤実践では栽培活動を通した子どもたちのアサガオヘヤワラジムシへの強い関心を観察記録を通して育てていく。認識としてはまだ未分化な段階である低学年においては、豊かな経験を、言葉を通して学んでいくことで、のちの理科で活かされる自然認識や、それを背景として成り立っていく社会認識へとつながっていく、そのための「認識の土台」としての生活科実践を展開していくことが確認された。

2 渡部由佳実践

あしべつかぼちゃたんていだん

勤務校で10年続く地域に根ざした総合学習の実践では、完成されたカリキュラムを教師がどう実践していくのか、工夫の余地はあるのかという課題が出された。この学校ではカリキュラムが地域に根付いており、地域にとっても必要とされるカリキュラムと言える。地域連携という言葉がよく出てくるが、学校が地域を活用するというものではなく、地域の中の学校として地域をともにつくる期待がカリキュラムに込められていると言える。教師の創意工夫、子ども達に付けさせたい力は何かを再検討しつつさらなる展開が期待される。その視点として挙げられたのは、教科との関係である。理科や社会科で獲得された認識を総合学習のどこで活かすのか、また、総合で学んだ知見が、教科の認識にどうつながっていくのかという往還をイメージした展開が期待される。特に、『売る』活動においては、社会科の働く人の学習を通して、労働の対価の認識をもたせることによって、よりリアル

に『売る』ということの意味が捉えられるのではないだろうか。

3 高橋公平実践

厚田の漁業に関する綿密な教材研究を踏まえた3年生の総合学習の実践である。ホタテを食べたり、ニシンはずしをしたりといった様々な体験活動、見学、聞き取りと、目の前に広がるフィールドを有効に利用し、子どもたちが生き生きとまなぶ姿が見てとれた。しかし授業者は「ねらいのあまさ」を感じており、その理由として、「テーマが広すぎた」ことや、学習のプロセスの組み立てに課題があると語った。しかし、『安定的なホタテ漁』が厚田の全漁獲高の割合では少なく、主たるニシン・鮭の漁獲高の不安定さや、高齢化の問題など、地域の特殊性から日本社会の縮図・仕組みを、子どもたちは触れていた。学習のプロセスをもう少し整理し、『魚の取りかた』『漁師の仕事』『厚田漁港』『日本の漁業』というような学習内容のプロセスを具体的な題材から辿るような工夫ができたのではないかという話になった。その学習を通して子どもが、地域の中で何か取り組めないかという具体的な社会参加につながっていくことも希望として語られた。

4 滝澤 圭 実践

小さな集落の中で固着した人間関係や学力のつまづきなど、育ちづらさを抱えた子ども達と向き合いながら、『未来志向』テーマにした「ぼくの私の人生設計図」という小学6年の実践である。地域に存在する職業の種類が少なく、自分の将来の仕事を思い描くことが難しい子ども達一人ひとりと、将来就きたい仕事の具体的なルートを、年齢を追うごとに想像しながら制作していく。しかし単なる想像に終わらず、バイト代、北海道の最低賃金、進路など、現実の問題を教師が提示し、それを子どもがどう解決していこうかという実践は、見ていて明るい。そこには子どもの楽天性を活かしながら、未来を描こうとする姿勢があった。話題となっているキャリア教育にも十分つながる実践であった。討議では、多様な仕事のロールモデルの不在という課題や、労働とそれに見合う対価を得るということはどう教えていけばいいかといったこと、生活の中に『稼ぐ』という視点をもった実践をどう作っていくかということが話題となった。

報告 山口アンナ真美

軍事政権の元で小学校から大学院まで教育を受けたブラジルの道徳教育についての報告。ブラジルでは、道徳は1964年から85年まで、キリスト教に基づいた倫理観を背景に、軍政が求める公民としての基礎教養を培うための教科として教えられていた。当時は単独教科書、検定教科書、評価の実施という形で進められており、現在ではブラジルで反省すべき点として捉えられている。当時は「道徳と公民の国家委員会」主導で「学校シビックセンター」が保護者・教師、学生、教委で組織されており、その目的は、国家のイデオロギ

一を注入する相互監視機関であった。

次年度からの道徳の教科化に向けて参考としていきたい事例の報告であった。

中川さん

総合学習の授業づくりについて、体験活動はするけれど、その前後をどうつなぐのがある学習として組んでいくかという悩みが報告された。厚沢部の勤務校の地区は、米づくりの歴史が古く、その点においては地域の歴史や産業とからめた展開を、体験を楽しむことを通して進めていくことができるのではないか、教師が教材の「面白い」と思った所を子どもたちと一緒に探求していくことで、学習が深まることもあるという討議が出された。

前田報告

共同研究者の前田氏からは、ここ10年の本分科会のキーワードとなった、「地域をともに作る」「学校としてのカリキュラム作り」について整理してもらった。